



淡座

江戸にまなび、

音と言葉のあわいをえがく

淡座(あわいざ)は、現代音楽、クラシック音楽、日本の芸術文化を行き来し、文化の古今と東西をつなぐことを目的とした、クリエイショングループです。

私たちは、様々な日本の文化のなかでも、とりわけ、江戸文化から学ぼうとしています。江戸文化独自の発想のもと、「形のないもの、目に見えないもの」、つまり、言葉、文化、哲学、思想など、ひとの生活を豊かにするものを探る方を模索し、作品や演奏として発信しています。

たきもと みさと 瀧本実里

栃木県出身。東京音楽大学を卒業。フルートを坂本しのぶ氏、工藤重典氏に師事。

日本音楽コンクールフルート部門、東京音楽コンクール木管部門、びわ湖国際フルートコンクール、三田ユネスコフルートコンクール、日本フルートコンヴェンションコンクールフルート・ソロ部門、仙台フルートコンクール、いずれも第1位。2016~18年、小澤征爾音楽塾に参加。2018年度ロームミュージックファンデーション奨学生。

これまでに東京フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団と共演。NHK-FM「リサイタル・パジャオ」に出演。



本日の演奏をアーカイブで
もう一度お楽しみ頂くこともできます

淡座リサイタルシリーズ Vol.2
無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ・パルティータ全曲
無伴奏チェロ組曲全曲演奏会
バッハの場にわ
第6回

日時 2021年12月18日(土)
16:30 開場
17:00 開演

会場 安養院瑠璃光堂
ゲスト出演 瀧本実里(フルート)

淡座

三瀬 俊吾(ヴァイオリン)
竹本 聖子(チェロ)
桑原 ゆう(作曲)

今回は、本條秀慈郎はお休みです
映像協力/株式会社たんどる
宣伝美術/桑原ゆう
主催/一般社団法人淡座
共催/安養院

場

12画
ジヨウ(チャウ)
ば・にわ

易は玉(日)を台(二)の上に置き、玉の光が下方に反射する形。易は霊の力を持つと考えられた玉によって、人の精気を盛んにし、豊かにする魂振りの儀式をいい、その儀式の行われるところを場という。また神を祭るところを場と
いった。

(白川静「常用字解」平凡社より)

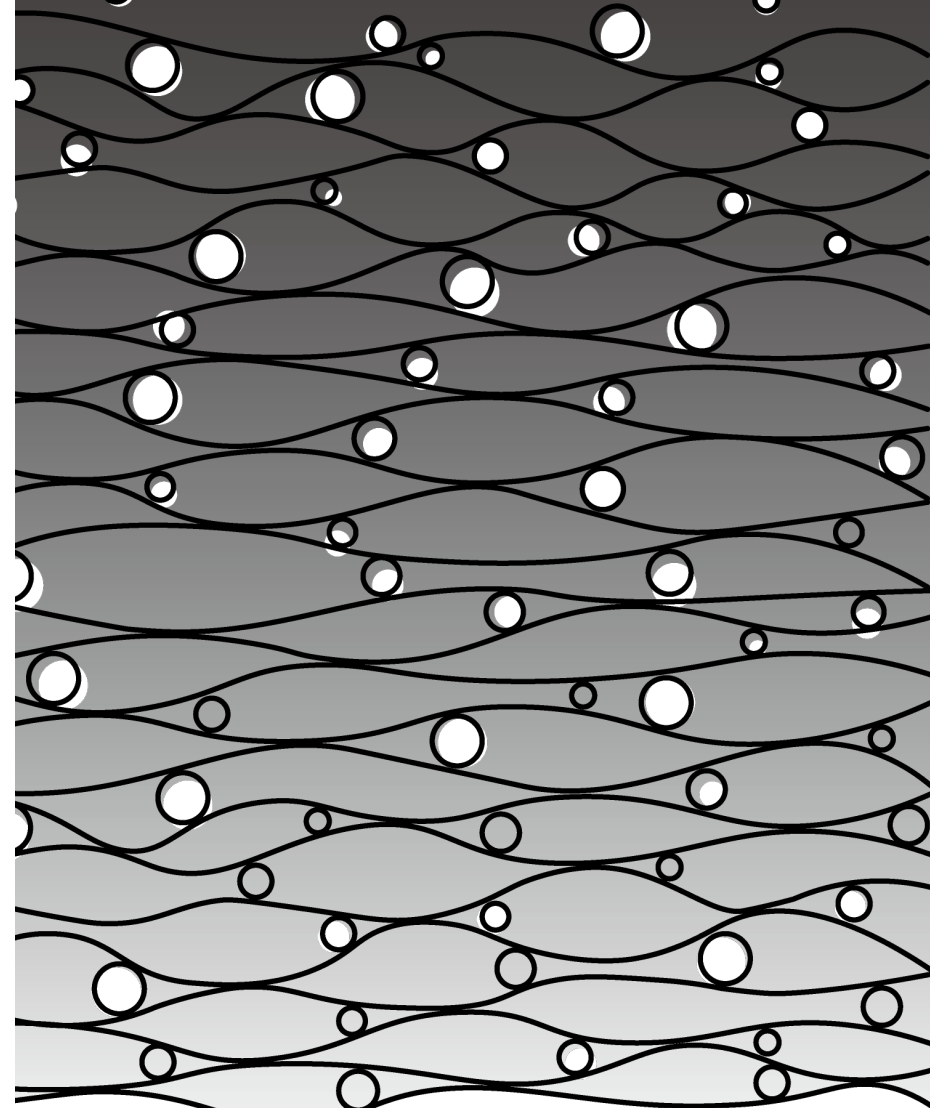
バッハの音楽は「場」になる。
「距離を取る」ことが求められる今こそ追求する独奏で
「場」に触れ、疫病退散を祈念する連続演奏会。

あわいざ
淡座リサイタルシリーズ Vol.2

バッハの場

第6回

無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ・パルティータ全曲
無伴奏チェロ組曲全曲演奏会



感染症対策のひとつ「人と人との接触を最小限に留めること」を逆手に取り、独奏を追求するリサイタルシリーズ。

ひと月に1回ペースの全6回公演で、三瀬と竹本が、バッハの無伴奏全曲演奏に挑戦。桑原作品を組み合わせたプログラムで、ふたりの独奏を存分にご堪能いただきます。第6回は、ゲストとして、安養院にゆかりのあるフルート奏者、瀧本実里さんをお迎えします。

各回、アフターイベントで作品や演奏をさらに深掘りし、次の回につなげていきます。第3回以降、安養院内庭園舞台での演奏も検討しており、バッハの「場」を淡座ならではの視点で、多角的に追求する試みです。

● 曲目と解説

いよいよ最終回。ヴァイオリンもチェロも、全6作品を弾き終えた先に、何が見えるでしょう。今回は、瀧本実里さんをゲストにお迎えし、フルートのための無伴奏作品もお楽しみいただきます。アフターイベントは、安養院本堂でのミニコンサートです。

J.S. バッハ／無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第3番 ホ長調 BWV1006

- 第1楽章 Preludio プレルディオ 3/4
- 第2楽章 Loure ルール 6/4
- 第3楽章 Gavotte en Rondeau ガヴォット アン ロンド 2/4
- 第4楽章 Menuet I メヌエツト I 3/4
- 第5楽章 Menuet II メヌエツト II 3/4
- 第6楽章 Bourrée ブーレ 2/2
- 第7楽章 Gigue ジーグ 6/8

全楽章を通して、ホ長調で構成されている。

第1楽章は、チェロ組曲第1番の第1曲と対を成すような前奏曲。第2楽章以降舞曲が続く、表記もイタリア語からフランス語になる。ルールは比較的テンポが遅く、複数の旋律が行き交う。第3楽章はロンド形式のガヴォットを意味するが、ロンドとは一つのテーマを何度も繰り返しながら、間に違う旋律を挟む形式である。メヌエツトが2曲、ブーレ、ジーグと短い楽章が続く、あつという間に終曲となる。この流れは、後に作曲されるフランス組曲第6番 BWV817と似ている。

ちなみに、フランス組曲第6番の調性も、同じくホ長調である。フランス組曲も全6曲の曲集で、ほかにもブランデンブルク協奏曲、イギリス組曲、パルティータ (BWV825～830) など、バッハが多くの曲集を何故全6曲にしたのか、興味深い。

(文／三瀬 俊吾)

J.S. バッハ／無伴奏フルートのためのパルティータ イ短調 BWV1013

- 第1楽章 アルマンド 第2楽章 コレンテ
- 第3楽章 サラバンド 第4楽章 プレー・アングレーズ

バッハによる唯一のフルート独奏曲。「パルティータ」はバッハ自身がつけた表題ではなく、唯一現存する1720年代の筆写譜には、『J.S. バッハによるフラウト・トラヴェルソのためのソロ』と、フランス語で記されている。フラウト・トラヴェルソはバロック時代の木のフルートで、「トラヴェルソ」は「横向きの」という意味。なぜ、わざわざ「横向きのフルート」と区別するかというと、当時フルートといえはリコーダーを指したからである。

バロック組曲の定型に準じ4つの舞曲から成るが、他のバッハの組曲やパルティータのようにジーグで締めくくるとはなく、プレーで終わる。おそらく、ジーグの作曲も予定されていたが、実現されなかったのだろう。

ドレスデンの交響楽団で活躍していた名手ビュファルダンを想定して書かれたと思われるが、息つき箇所少なさや、弦楽器や鍵盤楽器向きの跳躍をふくむ分散和音音型の多用から、最初は他の楽器のために作曲されたともいわれ、謎が多い。全楽章がイ短調で書かれている。

(文／桑原 ゆう)



J.S. バッハ／無伴奏チェロのための組曲 第6番 ニ長調 BWV1012

- 1. プレリユード 2. アルマンド 3. クーラント
- 4. サラバンド 5. ガヴォット 6. ジーグ

第6番の組曲は、最高弦A線の上にE線を加えた5本弦の楽器用に書かれた作品。5本弦の楽器とは、18世紀に用いられた5弦のヴィオラ「ヴィオラ・ポンポーザ」、肩にかけて演奏する「ヴィオロンチェロ・ダ・ス帕ラ」といった小型の楽器を指すと言われているが、楽譜に記載がないため、今日でも謎に包まれている。チェロで演奏するには難易度が高く、「チェロピッコロ」という楽器で演奏されることもある。高い音域を用いた、輝かしさを感じさせる組曲。

プレリユードは、3連符の躍動感溢れるリズムが特徴。アルマンドはゆったりと長い息遣いを持ち、エレガントな雰囲気。クーラントは、駆けめぐるような軽やかさが魅力的。サラバンドは、和音が豊かに響く折りのような楽曲。ガヴォットはチャーミングな作品で、中間部は持続する音がバグパイプのように響き、素朴で牧歌的である。終曲ジーグは快活で、華やかに曲を締めくくる。

(文／竹本 聖子)

桑原 ゆう／無伴奏ヴァイオリンのための バッハの名による小ソナタ (2021)

- 1. プレリユード 2. アルマンド 3. クーラント 4. サラバンド 5. フーガ
- 6. ルール 7. ガヴォット 8. メヌエツト 9. ブーレ 10. ジーグ 11. シャコンヌ

バッハ (BACH) の名前を音名にすると、「シレラドシロ」という連なりが得られる。バッハ自身をはじめ、古今さまざまな作曲家が作品に用いた、あまりにも有名な音列から構想した、11の小品から成る小ソナタ。

各曲の楽想は、バッハのヴァイオリンソナタ、パルティータ、チェロ組曲に採用された様式から選び、バロック組曲にならった順番で配置している。全11曲とはいえ、各々は極めて短く、1分もかからない曲がほとんどである。「バッハの場」の一旦の締め括りとして、改めてバッハに敬意を表しつつ、全6回の演奏会を走馬燈のように振り返る作品になればうれしい。

前回の《ソナタ・ヴォカリーズ》、今回の《小ソナタ》ともに、本企画で「ソナタ」から自身の音楽言語をさらに開拓するまでには至らなかったため、折を見て、また「ソナタ」に挑戦を仕掛けたいと思う。

(文／桑原 ゆう)